

鷺内遺跡の調査では、縄文時代の後晩期（3400～2500年前）の水が湧く、または水が溜まる状態の穴を 32 基検出しました。

この穴の土は、水分を多く含んでいたため、通常は腐ってしまうドングリやタケ・ササ類で作られたかご、ざるなどが出土しました。

特にタケ・ササ類で作られたかご、ざるは 16 点にもおよび多様な製品が含まれていることが特徴的です。中でも、くるみが詰まったかごは、使用状態のまま発見されたと考えられ、縄文時代のかごの利用や木の実の処理を考える上で、貴重な事例と注目されています。

くるみかごの発見

穴の中から、くるみがまともに見つかりました。このまともをそのまま包むように取り上げてひっくり返し、室内で下（裏）側の土を取り除くと、かごが発見されました。



鷺内遺跡の穴は何に使われた？

くるみかごなどが出土した水が湧く、溜まる穴は何に使われたのでしょうか？穴の中からはドングリがたくさん見つかるものがありますので、ドングリなどの虫殺しやアク抜きに使用されていたと考えられます。

このほか、木材を水漬けして保管することなどさまざまな水を利用した活動に使われていたことも推定できます。現在は、出土したドングリや、土の中に含まれる花粉などを細かく分析して、その具体的な使われ方を研究しています。

